

方言コミュニケーションプロジェクト活動報告

著者	尾? 梨玖, 佐藤 和範, 岩崎 真梨子
著者別名	OZAKI Riku, SATO Kazunori, IWASAKI Mariko
雑誌名	八戸工業大学紀要
巻	38
ページ	129-135
発行年	2019-03-01
URL	http://doi.org/10.32127/00003869

方言コミュニケーションプロジェクト活動報告

尾崎 梨玖[†]・佐藤 和範^{††}・岩崎 真梨子^{†††}

Report of the Dialect communication project

by the Dialect study group of Hachinohe Institute of Technology

Riku OZAKI[†], Kazunori SATO^{††} and Mariko IWASAKI^{†††}

ABSTRACT

A volunteer group of students with an interest in dialects was created. The research goals were to increase the awareness of dialects and to facilitate communication between the young and the elderly. The researchers investigated southern Japanese dialects and sought to support them through the creation and demonstration of dialect applications, event participation, and surveys. The researchers were successful in fostering interest in dialects among young people and are one step closer to achieving their goal. Opinions are divided as to whether young people should understand and maintain an interest in dialects, or whether the elderly should understand standard Japanese and recognize a dialect as a dialect. The researchers believe that as a part of traditional culture, dialects should be treated with respect and preserved.

Key Words: communication youth vocabulary, Nanbu dialect, the application of the Nanbu dialect, dialect questionnaire

キーワード: コミュニケーション, 若者の言葉, 南部方言, アプリケーション, 方言アンケート調査

1. はじめに

方言コミュニケーションプロジェクトは、方言の理解度や認知度を向上させるといった事業目的のために、学生チャレンジプロジェクトの一環として行った活動である。有志団体である八戸工業大学 方言研究会で実施した。

学生チャレンジプロジェクトとは、八戸工業

大学に在籍する学生3名以上で構成されたグループを対象に、自ら企画する調査・研究、地域貢献、ボランティア活動などのプロジェクトについて助成することを目的とした事業である。

この事業を通して、若者、特に子供に方言に興味をもってもらうことができたと考える。各イベントで多くの子供がアプリケーションを体験し、「面白い」という感想を述べた。イベントに参加したことで、方言に興味をもつ若者が増えることに期待したい。

平成 30 年 12 月 10 日 受付

[†] 工学部システム情報工学科・2年

^{††} 工学部システム情報工学科・3年

^{†††} 基礎教育研究センター・講師

2. 事業目的と活動内容

方言の理解度と知名度の向上、若年層と高齢層の円滑な意思疎通を図ることを目的とする。今日では、たとえ地元の方言であっても、特に若者や年少者でその方言を知らない場合は、異質なもののよう捉えて使いにくく感じてしまうのではないかと思う。そうしたことによって、若年層と高齢者との間に、言葉の壁ができてい

るのではないだろうかと考えた。そこで、八戸工業大学 方言研究では、次の3つの活動を行った。

①方言アンケート調査

若年層がどのような言葉を使っているか、現状を知り、どのくらい方言が認識、理解されているかを確認した。

②方言ガイドブック『青森県南部地域方言ガイドブック』(私費製作)の紹介ならびに販売
若者が使っている今どきの方言の紹介と、「シャッコイ(冷たい)」や「セッカンスル(ヘッカンスルとも、共通語での意味はいじめる)」のような伝統的な方言の両方を取り上げ、若年層から高齢層まで楽しめるような内容で作製したものである。

③方言アプリケーション「OK,Hougen!」体験会
方言アプリケーションについては、別途記述する。

以上の活動について、各イベントでワークショップを開催し、方言アンケート調査に答えてもらったり、方言ガイドブックやその他を配布したり、方言アプリケーションの体験をしてももらったりした。

また、青森市で開催された研修会に参加し、高齢層と交流して方言アプリケーションを紹介するという活動も行った。

3. 事業計画

事業計画は次の通りである。

7月：方言アプリケーションを準備、作成する。

8月：イベントを企画し、参加する。

[イベント終了ごとに報告書を作成する]

9月：中間発表を経て、道仏公民館で研修会を実施する。

[これまでの活動を振り返り、検証する]

また、中間発表と研修会とを踏まえ、9月19日に岩手県でポスター発表を予定。

10月：学園祭に参加する。

[ワークショップを開催し、方言アプリケーション体験、アンケート調査を実施する。また、方言ガイドブックを販売する]

11月：中間発表会。はっちと八戸ブックセンターにて、学園祭と同様のワークショップを実施する。

12月：報告書を作成する。

2月：最終報告会を実施する。

3月：結果・まとめ。

4. 活動報告

4.1 方言アンケート調査

2節②でも取り上げた通り、アンケート調査においても、若年層でも使いそうな方言と、伝統的な方言の2種類について、アンケート調査を各イベントで実施した。また、本学の学生や、西日本の大学にも依頼し、幅広い地域で調査を行った。実施期間は2018年4月から7月にかけてであり、436名に回答いただいた。

このアンケートの調査結果に関しては、高島・岩崎(2019)を参照されたい。

4.2 はちのへホコテン

2018年6月24日に八戸市中心街で行われたホコテンに参加した。はちのへホコテンとは、株式会社まちづくり八戸が実施している市内での

イベントで、ホームページで次のように案内されている。

はちのへホコテンは、楽しくにぎわい溢れる中心市街地を目指し、5月～10月（7月を除く）の毎月1回、最終日曜日に中心商店街のメインストリートを交通規制にするイベントです。

(<http://www.8town.co.jp/hokoten/index.html>)

そこで方言アンケート調査と方言ガイドブックの販売を行った。



写真1 ホコテンでのアンケート調査

このように、往来にテーブルやパラソルを出し、訪れてくれた方々にアンケートをお願いした。また、方言ガイドブックを好きな値段で買ってもらい、平均値を出したところ、200円という結果になった。このイベント以後、方言ガイドブックは200円で販売している。

4.3 八戸工業大学サマーサイエンスプログラム

八戸工業大学サマーサイエンスプログラムとは、高大連携事業の一環として、付属高校である八戸工業大学第二高等学校と実施している体験型プログラムである。生徒が希望するテーマの研究室で実験・実習を行う。

2018年度は、8月2日と3日にかけて開催された。八戸工業大学 方言研究会は8月3日に「方

言アプリで方言研究 ―OK,hougen―」の補助として参加した。

この活動により、完成したアプリケーションの試運転を行い、実際に動くことを確認した。



写真2 高校生の方言アプリケーション体験の様子

4.4 科学の祭典

2018年8月11日、8月12日に八戸市視聴覚センター児童科学館で行われた「青少年のための科学の祭典」に参加した。「青少年のための科学の祭典」概要は以下の通りである。

「青少年のための科学の祭典」は、理科や数学あるいは科学技術といった分野の実験や工作を一同に集めて来場者に楽しんでもらうイベントです。

「青少年のための科学の祭典」には、「ブース」、「ステージ」、「ワークショップ」という実験演示形式があります。

(<http://www.kagakunosaiten.jp/about/about.php>)

このイベントでは、方言アプリケーションの展示および方言アンケート調査を行った。そこで、方言アプリケーションに関する重大な欠陥が明らかになった。

このアプリケーションは、若年層、特に子供に方言への興味・関心を持ってほしいという目的から作製したものである。ところで、アプリケーションが子供の声を認識しにくかった。

体験を繰り返すなかで、子供のなかでも、特に小学校低学年の子供の声を認識しにくく、小学校高学年であれば男子の声はほぼ認識するようだということが明らかになった。この原因は、子供の声の高さにあると考えられる。高い声は音声認識ができず、方言に変換することができない。しかし、現状ではこの問題は解決しにくいので、音声認識を改善するのではなく、アプリケーションに標準語一覧表を表示して、認識できないときは一覧表から選んでもらうように工夫した。



写真3 科学の祭典1日目の様子



写真4 科学の祭典2日目の様子

一方、中学生以上では音声認識に問題がないようであり、繰り返し標準語を話して方言に翻訳している子供も見られた。この活動を通して、

若年層、特に子供に方言に対する興味・関心を持ってもらうことができたと考える。

4.5 学園祭

八戸工業大学で2018年10月6日、10月7日に行われた学園祭に参加した。

「OK,Hougen!」というチーム名で活動し、方言アプリケーションの展示と、方言アンケート調査、方言ガイドブックの販売を行った。



写真5 学園祭での方言アプリケーション体験の様子

この活動の結果、展示部門で学務部長賞を受賞した。



写真6 表彰式の様子

4.6 中間報告会

2018年11月10日、八戸市のショッピングモールラピアのラピアホールで、学生チャレンジプロジェクトの中間報告会が行われた。



写真7 中間報告会のプレゼンテーションの様子



写真8 中間報告会の質疑応答の様子

質疑応答のなかで、現在のような単語レベルでの翻訳ではなく、自由に話した内容も翻訳できると良い、という意見をいただいた。今後の課題としたい。

4.7 イノベーション・ベンチャーアイデアコンテスト

2018年12月1日午前、グランドサンピア八戸にて、青森COC+推進機構(八戸ブロック)等が主催している企画、「イノベーション・ベンチャーアイデアコンテスト」に参加した。

学生3名と指導教員の計4名で参加し、後述する方言アプリケーションについて3分間のプレゼンテーションと40分間のポスター発表をし、来場者に方言アプリケーションの説明をした。プレゼンテーションは、アプリケーション開発者の佐藤和範(システム情報工学科3年)が行った。

結果として、受賞することはできなかったが、今後の課題や、アドバイスを頂くことができたので、活かしていきたい。

4.8 2018 正部家種忌 第6回南部弁の日

2018年12月1日午後、八戸ポータルミュージアムはっちにて、南部弁の日に参加した。ここでは、八戸工業大学での取り組みとして、方言アプリケーション「OK,Hougen!」を紹介し、そして実際に来場者に体験していただいた。プレゼンテーションは引き続き佐藤が行い、その他の方言研究会のメンバーと協力して、来場者の方にアプリケーションを体験していただいた。

アプリケーションを体験していただくなかで、共通語で「全くできない」を意味する「マルコ」という方言が取り上げられたが、これは「マルッコ」と促音を入れて記載すべきである、方言の記述を正しく行うべきであるという指摘を受けた。これについては、地元で方言をよく使う学生が研究会にいないことも影響して起きるミスであり、今後も地域の方の確認などを受けてアプリケーションを改善していく必要があるということが明らかになった。

南部弁の日でのプレゼンテーションにより、

デーリー東北新聞社に方言アプリケーションが取り上げられ、2018 年 12 月 5 日に新聞記事として掲載された。



写真9 方言アプリケーション紹介記事(web版)

4.9 実施できなかったこと

計画していた自主的に開催する研修会、ならびにブックセンターでのワークショップは、実施することができなかった。

ただし、2018 年 10 月 21 日に平成 30 年度文化庁被災地における方言の活性化支援事業「発信！方言の魅力 かだるびや・かだるべし 青森県の方言 2018」語り部情報交換会・講演会(弘前学院大学主催、於青森県総合社会教育センター 2 階 第 1 研修室)が開催され、八戸工業大学 方言研究会メンバーの高島直人(土木建築工学科 3 年)が参加した。会のプログラムは下記の通りである。

1. 語り部情報交換会 10:30～11:45
2. 講演 岩崎真梨子氏 13:00～14:00
3. 講演 今村かほる氏 14:15～15:30
4. 全体会 15:30～15:40

高島は、プログラム 2 で、方言アプリケーションの説明を行った。

4.10 今後の活動

今後は、学生チャレンジプロジェクトの最終報告会に参加する。これまでに得た課題を少し

でも解決し、最終報告会に臨みたい。

5. 方言アプリケーション「OK,Hougen!」について

方言アプリケーション「OK,Hougen!」は、方言が衰退していく現状で、特に若者の方言に対する認知度を上げることを目的として開発した。若者に対し、「方言の現状を伝え、頑張って勉強してもらおう」のではなく、「気軽に楽しく方言に触れ、まずは方言を身近な存在に感じてもらう」ことが大切であると考えた。

使用方法是以下の通りである。

1. マイクに向かって方言を話す。
2. 対応する南部方言に翻訳される（具体的な例文を収録し、実際の音声聞ける。）
3. 標準語、南部方言双方の音声波形を見ることができる。

実際に表示される画面は、以下の通りである。



写真10 アプリケーション画面

各イベントでワークショップを行った結果、以下のようなことが明らかになった。

- 中学生以上の関心が高かった。(積極的にマイクに向かって話し、楽しんでいるようだった)
- 高校生以上の場合、音声認識に対しても興

味を持ち、複数人で話しかけてみるなど、様々な話し方を試していた。

- 成人以上の場合、「聞いたことがある」など思い出すことにも繋がっているようだった。

アプリ使用者全員にいえることとして、何度も繰り返し遊ぶ中で、知らず知らずのうちに数多くの南部方言に触れている。以上のことから、若年層には南部方言に対する興味・関心を持たせ、高齢層には南部方言と標準語の違いなどを意識させる効果があるのではないかと考える。

6. 事業効果まとめ

この事業を通して、若者、特に子供に方言への興味・関心をもってもらえることができたと考ええる。特に、8月に開催された科学の祭典2018で、多くの子供がアプリケーションを体験し、面白いと言っていた点が良いと考える。

各イベントへの参加を通して、方言に興味をもつ若者が増え、目的である方言の理解度や知名度、認知度の向上、そして、若年層と高齢層との言葉の壁・隔たりが薄くなるということが少しでも達成できたのではないかと考える。ゆくゆくは、日常的に南部方言を話す人と、話さない人、知らない人の隔たりをなくしたい。そ

して、Uターン、Iターンが促進され、地域の活性化が進んで欲しい。

7. おわりに

以上の通り、方言コミュニケーションプロジェクトの事業内容を報告した。

私たちの活動によって、方言の理解度や知名度、認知度が向上し、方言という歴史ある言葉が消えないように若者と高齢層が歩み寄れたらよいと考える。地域の方言を引き継いでいくことや、世代間による言葉の隔たりをなくすことに貢献したい。

最後に、プロジェクトの終了までに、未完成である方言アプリケーションについて、リクエストの多かった「方言から標準語への変換」の実装などを実現させ、少しでも地域の方の期待に応える形で終了させたいと考える。方言アプリケーションの完成を今後の課題として努力していきたい。

参考文献

- 1) <http://www.8town.co.jp/hokoten/index.html> <2018 年 12 月 10 日アクセス>
- 2) <http://www.kagakunosaiten.jp/about/about.php> <2018 年 12 月 10 日アクセス>

要 旨

方言に興味をもった学生による有志団体を結成し、方言の知名度の向上や若者と高齢層の意思疎通を図ることを目標・目的として活動を行い、方言アプリケーションの作成、各イベントに参加し、方言アプリケーションの展示、アンケート調査等を行い、南部方言の調査や方言の普及活動を行った。その結果として、若者(子供)に興味をもってもらえることができ、目標に一步近づくことができたといえる。若者が方言に興味を持ち方言を理解すること、高齢層が方言を方言であると認識し、標準語を理解することのどちらが良いのかについても意見が分かれると思うが、我々は、方言という伝統ある文化を大事にし、残すことを選択したいと考えた。

キーワード: コミュニケーション, 若者の言葉, 南部方言, アプリケーション, 方言アンケート調査